

## 1996 年の果樹カメムシ類の多発生と被害の解析—ナシ—

福岡県病害虫防除所 **佐 藤 亮 助**

## はじめに

1996 年の前半は、西日本を中心に果樹を加害するカメムシ類が大発生した。福岡県でも 1990 年以來 6 年ぶりに大発生したが、その発生は越冬成虫が主体となり 7 月までに誘殺ピークが形成される前期発生型（宮原ら、1978）であった。前期発生型としては過去最大の発生となった。

ウメ、スモモ、モモ、ナシ、ビワなどの果樹園にカメムシ類が早期から飛来し、被害を受けたのをはじめ、これまで 6 月に加害が問題とならなかったウンシュウミカン、ブドウ、カキにも被害が発生した。

本県の場合予察灯に誘殺されるカメムシ類の 80～90% がチャバネアオカメムシで占められることから、ここではチャバネアオカメムシを中心に多発生の要因とナシの被害について報告する。

## I 多発の要因と発生消長

カメムシ類は 1996 年の春先から大発生した。カメムシ類の前期の発生量は前年からの越冬量に左右される。山田ら（1983）の方法によって調査したチャバネアオカメムシの越冬量を図-1 に示した。1995 年から 1996 年への越冬密度は平年の約 9 倍の 14.6 頭/m<sup>2</sup>（平年：1.6 頭/m<sup>2</sup>）と非常に多かった。過去 10 年間で最も多かった平成 3 年（5.5 頭/m<sup>2</sup>）に比べても約 3 倍の越冬密度であった。このことから、1996 年は春先からカメムシ類が多発することが予想されていたので、福岡県では 3 月 4 日に注意報を発表して注意を喚起した。越冬量が多かった原因として、1995 年のスギ、ヒノキの毬果が大豊作でスギ、ヒノキ樹上で大発生していたカメムシがそのまま越冬したものと考えられた。

過去前期に多発した年次と 1996 年の予察灯によるチャバネアオカメムシの誘殺消長を図-2 に示した。

1996 年の誘殺数は予想どおり平年の誘殺数に比べ極めて多く、筑紫野市の予察灯におけるチャバネアオカメムシの 6 月の総誘殺数は平年の約 14 倍、7 月の総誘殺

数（23,964 頭）は平年の約 40 倍に達した。誘殺ピークは 7 月 20 日から 25 日の 5 日間で約 6,000 頭が誘殺された。

1996 年のような極めて多い越冬量は今までに経験がなかったことから、誘殺数がどのレベルまで増加していくのか、また果樹園にいつ侵入するのか、その発生量と侵入時期の予測を行うことが困難であった。

## II 防除と被害

福岡県のナシ結果樹面積は約 580 ha でその約 64% が幸水・豊水の赤ナシで占められる。収穫は幸水が 8 月上

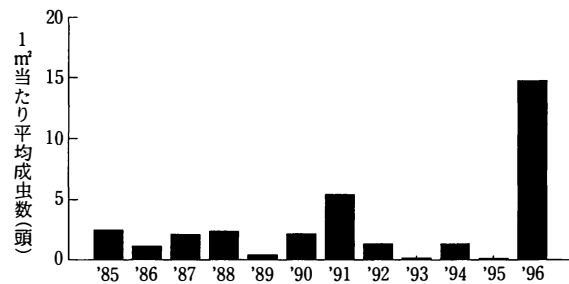


図-1 チャバネアオカメムシの越冬量の年次比較（県平均）

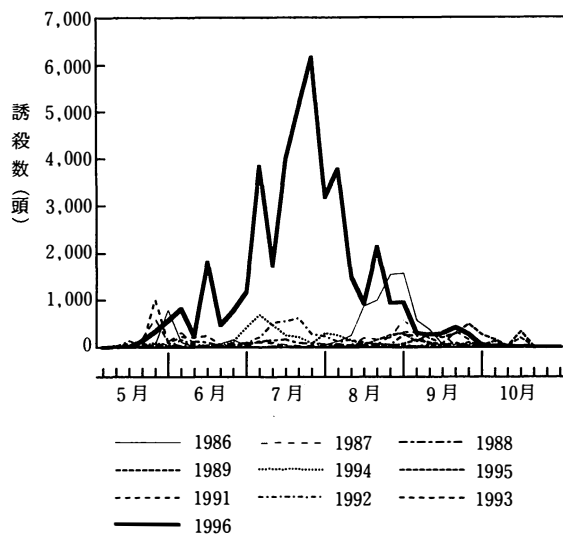


図-2 予察灯に誘殺されたチャバネアオカメムシの消長

Outbreak of the Brownwinged Green Stink Bug and its Damage to Pear in 1996. By Ryosuke SATO

(キーワード：カメムシ類、チャバネアオカメムシ、ナシ、被害解析)

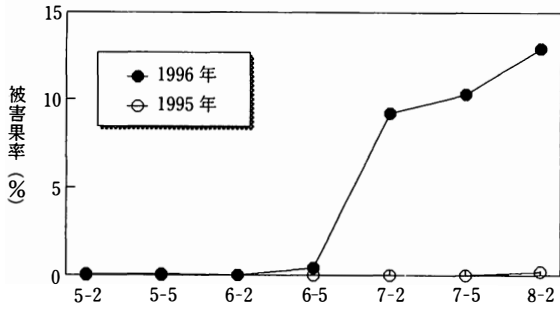


図-3 カメムシ類によるナシの被害状況 (幸水・豊水)

旬から中旬、豊水は8月下旬から9月上旬にかけて行われる。

ナシはカメムシの加害によって落果しないので、肥大して変形果となって初めて被害に気づくことになり、防除が手遅れになりがちである。このことから、ナシ産地では予防的に6月に2~3回一斉防除を行ったところが多かった。

果樹園内に大飛来し始めた6月6半旬以降、ナシ産地を含めカキ、ブドウ、カンキツなどの各果樹産地において防除が行われた。大飛来があった果樹園では、連日あるいは2~3日に1回の頻度で防除を行っても連続的に飛来が続き被害を防ぐことができなかった。例えば、山間地の果樹園では尾根に近い場所、また、山林に隣接している園ではその隣接部に集中飛来が多い傾向にあった。ナシ園においても連日飛来があった園では、薬剤防除では被害をくい止めることができなかった。

浮羽地域や県南の筑後地域におけるナシ主要産地園場における1995年と96年のカメムシによるナシ果実の被害状況を図-3に示した。1996年は被害果率が7月2半旬に一気に10%になった後増加傾向が続き、8月2半旬には13%を超える被害果率となり、被害がほとんどなかった前年に比べ著しく被害を受けた年となった。被害果の発生推移から、ナシ園にカメムシが大量に飛来し加害が始まった時期は6月下旬であったことが推察され

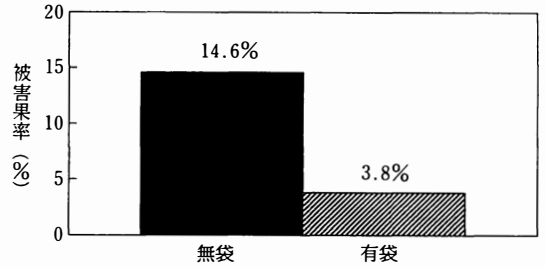


図-4 収穫時におけるナシ (豊水) の被害状況 (1996年)

た。

また、果実が肥大した7月下旬には有袋のナシでも袋の上から加害される事象が多く産地で観察されたが、収穫時における被害状況調査では、有袋ナシの被害果率は無袋ナシの1/3以下であった(図-4)。

#### おわりに

カメムシによる被害を未然に防ぐためには、カメムシの果樹園への侵入時期を予察することが欠かせないが、1996年のような多発年ではゲリラ的な集中飛来が多く、的確な予察が困難であった。被害を軽減するためには果樹園への侵入時期が予測できるより精度の高い予察技術の開発が必要である。

また、防除時期が梅雨期であったため、地盤がゆるくSSによる防除ができにくい点も防除対応を困難とした。さらに、有効な防除手段が農薬に限られており、多発年での防除は農家の労力や経済的負担が大きく、またカメムシに効果が高い合成ピレスロイド剤の多用はハダニ類やカイガラムシ類のリサーチを招く可能性があることから、薬剤以外の有効な防除法の研究、開発が望まれる。

#### 引用文献

- 1) 宮原 実ら (1978) : 福岡園試研報 16 : 13~17.
- 2) 山田健一ら (1983) : 九病虫研会報 29 : 158~163.